

《教育長メッセージ 第42号》

『お盆のお墓参り』

さまざまな宗教の方がいられるので、私の一個人の経験や思いとして受けとめていただければと思います。

私の家のお墓は、宮城県の志津川の大雄寺という曹洞宗のお寺にあります。子どもの頃に志津川に住んでいた時はもちろん、中学を卒業して志津川を出てからも、若い頃に山登りに夢中だった頃をのぞいて、毎年のように帰省ラッシュの中、田舎に帰って、お盆のお墓参りをしています。



子どもの頃は、夜が明けると同時に家族でお墓までの道を、花やお供え、お線香を持って歩きました。町中の人々が家族ごとに歩いて、お寺（お墓）に向かうので、途切れない行列のように、お墓までの道に人がつながりました。

お墓参りの時は、みんな小奇麗な洋服です。父のシャツがいつもより白く見えたし、私にも新しい服が用意されていました。だから、いつもの自分らしくなく、友だちに会うのがちょっと恥ずかしいなあとも思っていました。学校では、男勝りで、やけに口うるさい女の子もいつもと少し違うように見えました。

お墓参りの行列は、子どもの私にとって、何か、普段と違う、うっすら明るい不思議な光景でした。

お墓につくと、水をかけ、花を飾り、ハスの葉を敷いて、お供え物を供えます。団子やコメと野菜を細かく切って混ぜたもの、お菓子や果物が供えられ、お線香が焚かれます。それを父が家族に分けて、お線香を供えて手を合わせます。

お供え物は、食べて帰るのが習わしで、団子をいくつも食べさせられました。ブドウは食べたくなって仕方がなかったのですが、供えた団子を食べると病気をしないとわれ、強制的に口に運ばれました。

それでも、すべては食べることができませんから、残ったものは、お寺の近くに住む子どもたちのおやつか、カラスのごちそうになりました。

自分の家のお墓の次は、親戚のお墓をまわります。何箇所かまわる中で、父は、「ごこの家は朝早えなあ。」「ごごはまだが。」と言っていましたから、できるだけ早起きして、朝早くにお参りすることが、大切だったようです。

また、お墓参りの前に、どこの家でも墓掃除に行きましたから、どれだけお墓をきれいにしているかが、とても大切だったようです。

ご先祖への畏敬の念がそうさせているのですが、田舎では、それ以

上に、人の目が気になるようでした。

父が体調を崩してからは、私が早めに帰省して、お墓の掃除をすることになりました。草が広がる梅雨前には、親戚の方をお願いして一度、掃除をしていただいていたのですが、それでも草が生い茂って、お墓の掃除は大変でした。ただ、何年か繰り返すうちに、父の使命が少しわかるような気がしました。お墓をきれいにし、墓石を拭くと、自分をきれいにしているような感じがしました。

近頃は、昔の習わしのように朝早く行く人も少なくなり、道や駐車場が整備され、車で行く人がほとんどになってきました。

私もそのように車で行きますが、毎年、かかさずお墓参りをするという気持ちはつながっています。

父がしていたように、親戚のお墓もまわります。

私の息子たちも、生まれてから、毎年、私と同じようにお墓参りをしています。

そういう意味でも、思いがつながってほしいと私は思っています。

今回は、「教育課程」について、私の考えを述べてみたいと思います。